

『同志社大学英語英文学研究』

(同志社大学人文学会発行)の

既刊総目録編集に寄せて

斎藤 勇

『同志社大学英語英文学研究』(略称『同英研』)70(1998)に創刊以来の総目録を付することになった。一種の総括である。なぜこの時点でそうした総まとめをしなければならないのか。70という数字のうえでの半端のない切れ目を考えてのことか。実はそうではない。別の^{ちな}因みがあるのだ。本紀要の寄稿資格者は、その発行主体たる同志社大学人文学会の会員たるべし、ということになっていた。それはとりもなおさず同志社大学文学部英文学科専任教員と一般教育の英語担当専任教員であった。それが次号より英文学科の専任教員のみ^{のみ}の研究発表の場となり、かつての一般教育英語担当専任教員の方々は現在所属されている言語文化教育研究センターの発行する新紀要に寄稿されることになったからである。そもそも同志社大学が京都府下田辺町(現京田辺市)に新学舎を営み、英語担当の教員がその田辺のキャンパスで研究・教育に携ることになったのは1986年のこと。1993年4月1日に上記センターが開設され、爾後鋭意新しい研究発表機関誌の構想が育まれてきている。冒頭に「創刊以来云々」と記したが、それは1971年3月以来のことである。20年近く発行し続けてきたことになるが、実は人文学会発行の『同英研』の歴史は1948年まで遡ることができる。

太平洋戦争後ようやく文学部も整備され一学部三学科(英文学科, 文化学科, 社会学科)の体裁をほぼ備え、時を同じうして人文学会が創設され、そ

の研究紀要として年二回発行の『人文学』（第3輯より「同志社大学」の名が冠せられる）が発刊されている。その第1輯（1953年より「輯」を廃して「号」を付している）が1948年12月に発行された。寄稿論文の内容は各輯専門別に特定されず、カント論、社会福祉論、キーツ論などが一誌に同居している。これが第3輯（1950）より、学科、専攻別の論文収録という体裁をとり始め、英語英米文学に関しては「英文学研究特集」（第25号〔1956〕より「英語英文学研究特集」と副題され、第118号（1970）までこの体裁が続くのである。1971年に至って会則の変更により文学部各学科がそれぞれ誌名変更を行い（文化学科のみはもとの『人文学』の誌名をあらためて採用する）、『同志社大学英語英文学研究』（いわゆる『同英研』）、『評論・社会学』が発足する。しかし、いずれも発行主体は同志社大学人文学会である。（『同英研』は巻数をあらわすのに第何号を改めて単にナンバーのみにする）。一般教育の英語担当教員もいわゆる「特集」以来寄稿を続けてきた。それが今後センター発行の新紀要にのみ研究成果を発表される。そういうことで一つの区切りというか、節目を迎えるので、既刊号総目録作製という運びとなったわけだ。ただ同志社大学人文学会の機関誌という点では総目録は1948年以来というのがふさわしい。

そうなるとうる々の想いが去来する。私が英文学科の助手に就任したのが1953年、発刊当時の助手の方々はすでに停年退官していらっしやる。第3輯（1950）に矢野禾積（峰人）教授が『『文学界』と西洋文学』を発表しておられるが、実に136頁に及ぶ紀要論文としては量的にも大論文だ。この論文にまつわるとはかねて矢野教授に教室でうかがっていた。1945年、敗戦と同時にそのご奉職先国立台湾大学における同教授の冒大な蔵書はすべて戦勝国に接收されることになる。その中に長年営々と蒐集に努めてこられた雑誌『文学会』全巻53冊があった。せめてこれだけは、と懐に抱くようにして持参帰国され、同志社大学に職を奉ぜられたのだが、全冊揃えば、その時点で、この明治末（1893-1898）に浪漫主義、芸術至上主義を標榜し、新しい日本の文学運動の黎明を告げてき雑誌の功績を古今の泰西文学との接点を軸にして文を草

し、世に問わんと思ひ定めておられたものである。その意味で矢野教授の満を持した極めて野心作であり、学界に大きな波紋を生んだ。私は何度もそのご研究について拝聴していたので、印刷に付されるや貪るように読んだ。同年これが、京都、門書房より出版の運びとなる。

第22号(1956)、第32、33合併号(1957)に連載された上野直蔵教授の“The Religious View of Chaucer in His Italian Period”は後に補正され上野教授の博士論文となる(1959年、南雲堂より出版)。本邦最初の本格的に学問的なChaucer研究である。この「特集」時代には後日執筆者の博士論文となるものがその初出の場を提供されている場合が多い。岡本昌夫教授、林秋石(Lindley Williams Hubbell)教授のそれぞれ Coleridge の想像力説研究、Shakespeare 研究もその類いである。私もその驥尾きびに付して *Piers Plowman* 論を発表させていただいた(いずれも南雲堂より後日出版)。総じてこの「特集」時代は、現在のように原稿用紙枚数を制限することなく執筆者に存分に頁数を提供していた古き良き、おおらかな時代であったような気がする。

「特集」『同英研』を通覧してみるに、うたた感懐なきにしもあらずである。今は亡き方、退職された方の若き日、壮年の日々の研究活動が、バイオグラフィア・リテラリーヤとして展開されている。またお一人お一人の執心の研究テーマもこの総目録は提供してくれるのに吝かではない。

会員の退職記念号が間歇的かんげつに編集されてはいるが、特別のテーマの特集を組んだ例はないようである。中英語文学研究の論文とかロマン派詩人の研究論文がある号に集ったということはあっても、それはたまたまそうなただけのようだ。ただ一回 Emily Brontë, *Wuthering Heights* 研究と銘うって編集された号がある(『人文学』102号[1968])。思うに、これは Emily Brontë (1818-1848) 没後120年を記念しての企画であったろう。また英文学科で「英文学とヨブ記」というテーマで研究会が結成されたことがある。1970年代に『同英研』に逐次「ヨブ記」研究が頻出するのもその研究成果発表のシリーズである。

現役在職やご存命の方々の論文名，その評論については記述を差し控えた。紀要『人文学』（英語英文学研究特集），『同英研』の長き歴史を回顧叙述するのが本稿の目的であるからである。さもあらばあれ，一人の学者の長い研究生活も，こうして総目録の中で検してみるに，まことに須臾の間であるのを実感する。思えらく，学問という行く川の流れは絶えずして，しかも元の水にはあらず。我等「老イ易ク」，「一寸の光陰軽ンズベカラズ」である。私自身について言うならば「階前ノ梧葉ステニ秋声」の悔が残る。ああ，常住精励惜しむべからず！

『同英研』の向後の発展，期待される言語文化教育研究センターの新紀要の成功を衷心祈って擱筆する。